



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	近世における俵物・諸色の研究：北奥・蝦夷地を事例に〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	菅原，慶郎
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11625号
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58713
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Yoshiro_Sugawara_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 菅 原 慶 郎

	主査	准教授	谷 本 晃 久
審査委員	副査	准教授	橋 本 雄
	副査	教 授	佐々木 亨
	副査	教 授	川 上 淳 （札幌大学）

学位論文題名

近世における俵物・諸色の研究 ～北奥・蝦夷地を事例に～

本研究論文は、日本近世史、とりわけ流通経済史ならびに蝦夷地在地社会史の研究領域に属する論考である。その成果は、大きく分けて以下の4点にあるものと認められる。

①近世日本の貿易輸出物資のうち松前・北奥産の産物、とりわけ昆布・俵物・ラッコ皮に着目し、長崎の集荷機関史料を素材に、一手請方問屋仕入制末期から会所直仕入期前期を中心に、産地毎の占有率や廻漕のシステムを具体的に明らかにした点は、当該研究に貢献する面が少なくない。具体的には、従来の研究で意外にも活用されてこなかった、「長崎元俵物請方雑書」を丹念に読み込み、そこから得られたデータを先行研究と誠実に照らすことにより、公儀による集荷主体たる会所（請方問屋）側の視点から、各産物の集荷実態を論じた点は、学界に新知見を齎した。

②対唐船輸出品に占める「南部昆布」の地位を明確に論じた点は、独創的な研究成果となった。近世輸出海産物研究を体系づけた荒居英次はかつて、オランダ側史料の丹念な分析に基づき、輸出量・輸出額ともに、諸色のほとんどを昆布が占めることから、研究の重要性を喚起したが、その内実についての個別実証的な解明はされてきていなかった。一手請方問屋仕入制末期から会所直仕入期前期に、輸出昆布の過半を南部昆布が占めていたとする本論文の実証は、研究史上重要な指摘と評価できる。また、その理由として南部昆布の仕入れ価格の低廉さを指摘した点も、注目された。長崎回漕分の余剰が日本市場に商品として流通するという昆布の特質に基づき、日本市場における価値と唐船側の認める価値との差を要因として、長崎会所が調達商品を選定してい

たことが、本論文では示唆された。これは、「ミツイシ昆布」の需要とも共通する、興味深い指摘であると評価できる。国内需要と唐船需要との間の格差が、長崎回漕商品を決定している事例と見做されるからである。

③長崎一手請方問屋期における「松前三湊」惣問屋制」、ならびに松前地における「下請三湊」の存在を明らかにした点も、研究史に新たな視点を加えた。このシステムに関する個別事例研究としては、初めての成果である。日本市場向け松前蝦夷地産物の集荷システムについては、分厚い研究蓄積があるが、輸出海産物のそれについては、必ずしも明確にされてこなかった。むしろ、山丹交易向け毛皮集荷のシステムについて、出利葉浩司や長澤政之により、松前・蝦夷地そして北陸地方におけるそれが明らかにされている（松前地における下請集荷システムも明らかにされている）。本稿の成果のひとつは、こうした先行研究に照らすとき、その価値が増すものと捉えられる。

④加えて、西蝦夷地タカシマ場所・同オショロ場所、ならびに東蝦夷地トカチ場所を事例として、個別具体的に俵物・昆布の生産実態を、場所における産物生産サイクルを明らかにしたうえで論じた点は、近世蝦夷地在地社会史、もしくはアイヌ史的観点からも、貴重な叙述となった。いずれも、従来個別実証蓄積の必要性が指摘されてきた、近世蝦夷地「場所」の構造分析研究の体裁を備えているものと評価できる。とりわけ、アイヌ社会の疲弊が激しいとされてきた幕末の西蝦夷地中南部や、「場所」におけるアイヌの生産構造の個別実証が少ないと指摘されてきた東蝦夷地の昆布生産を、アイヌ集団が支えていたことを明らかにした点は、他地域の事例と比較するうえでも、興味深い成果となった。また、個別研究の蓄積が重ねられつつある、俵物生産が規定する地域社会構造というシェーマに関する、アイヌ集団を含む近世蝦夷地「場所」を対象とした事例研究としての意義も有する。

なお、総じて本論文は、一次史料の確かな選択と、その精緻な分析に基づいた、個別実証的な態度を貫いており、冷静で客観的な態度を貫いている。また著者は今後、北海道に根差した近世史研究を進めていく計画を有しているが、地域的事例からその特性を析出し、学術的に敷衍していこうとする手法は、④のみならず本稿全体を通観するに、十分身についているものと判断され、

今後の自律的な研究活動が可能な水準に達しているものと認められる。口頭試問では、実証された事例の全体史的位置づけや、先行研究との関連性の指摘に、やや不十分さが残る憾みが指摘されたものの、今後の研究において、こうした課題を自ら克服し得る意欲と力量が認められた。

以上の審査の結果、審査委員は全員一致して、本論文の著者である菅原慶郎氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。これを受け審査委員会の主査は、平成 27 年 2 月 23 日開催の本学文学研究科教授会において、審査報告を行なった。これを受け文学研究科教授会は、菅原慶郎氏にかかる本論文について、文学研究科課程博士学位論文審査要項第 8 条に基づき可否投票を行った結果、博士（文学）の学位を授与できるものと議決した。